

内子町合併20周年記念シンポジウム

歴史にのぞみ、未来をひらく



版画 山田きよさん

平成17年1月1日に旧内子・五十崎・小田の3町が合併して、今年で20年の節目を迎えました。合併当時も人口減少対策や産業振興など多くの課題がある中、内子町はまちづくりの指針となる10年間の計画「内子町総合計画」を策定し、未来に向けてまちの魅力を磨き続けてきました。現在、第3期総合計画の策定が進められており、7年4月からは新しい計画に基づくまちづくりが始まります。

今回は合併20周年を記念して2月8日に開かれたシンポジウムの様子を紹介します。開催にあたり、改めてまちを振り返り未来への課題解決のヒントにするため「内子町に住んどってよかったエピソード」を町民の皆さんに募集。寄せられた体験談を元に、幅広い世代の町民代表者が、内子町の良さを語り合いました。何気ない日常にたくさんの魅力があり、そしてそれらがまちづくりの根底にあることが見えてきます。皆さんも、自分の「住んどってよかった」を振り返ってみませんか。

シンポジウムでは町民代表者によるトークセッションを実施。「住んどってよかったエピソード」を元に、愛媛大学教授の井口梓さん、小野植正久町長とともに、まちの魅力を語り合いました。井口先生の講演と併せて紹介します。

第一部 トークセッション

寄せられたエピソードは、ホームページで公開しています。
ID 142469

森山 翼さん＝下立山＝
合併した平成17年1月生まれで、今年20歳を迎えた。本シンポジウムの司会を担当

内子座から広がる演劇文化

19歳の時、青年団で演劇に触れました。その後、町民劇団を結成して内子座の舞台を踏み、演劇を通じて人とつながり、とうとう芝居をしにアラスカまで行ってしまいました。内子座というすばらしい劇場で、生の舞台を気軽に楽しめる環境が、内子の演劇文化を広げているのだと思います。



徳田 幸治さん
＝内子10＝

内子ならではの子育てを

結婚を機に、東京から旦那の地元・上川地区へ。彼に「絶対に帰る」と言わせた内子で子育てをして感じるのは、地域との距離の近さ。祭りがあったり、おばあちゃんに「芋掘りしよう」と誘われたり、都会ではできない経験がいっぱい。「戻ってきたい」と言える子どもが育つまちって、すごいですね。



室岡 愛さん
＝上川中央＝



大程奈々絵さん
＝程内＝

「農」を通じた多くの出会い

道の駅からりへ農産物を出荷しています。農繁期の駅は生産者とお客さんで活気に満ち、季節ごとのおいしい野菜や果物がたくさん。農業を通じて多くの出会いがあります。またデッキから眺める川のせせらぎと季節の花々は心の癒し。ゆったり過ごせる、かけがえのないお気に入りの場所です。



和氣 巧磨さん
＝福岡＝

ずっと心に残る人の優しさ

周りの人の優しさに「住んでよかった」と感じます。中学の時の凧作りでは、和紙に竹をつけ文字を描く難しい作業を、地域の人が丁寧に教えてくれました。今、打ち込んでいるサッカーでも、部の先輩のサポートや周りの応援が温かいです。将来はそんな優しいっぱいの地元で働きたいです。



西岡千代子さん
＝小田下＝

地域愛にあふれたまち

町外から内子高校小田分校に来てくれた寮生に、「おばちゃん食堂」で食事を提供しています。話を聞いた人が「これ使って」と野菜を持ってきてくれたり、遠くの幼馴染が手伝いに帰ってくれたり——。生徒たちが喜ぶのが、みんなうれしいんです。私にとっても、地域の愛情に触れる瞬間です。

何気ない風景が僕の活力源

小学生の時、JR内子駅前に広がる田んぼの風景が好きでした。住宅街になった今では地域の子どたちが登校する姿に、昔を懐かしみながら元気をもらっています。大学を卒業したら、大好きな内子町のまちづくりのために、皆さんに習いながら自分のできることを探したいと思っています。



大西優太朗さん
＝内子4＝

歴史にのぞみ、未来をひらく まちづくりを目指して

第3期内子町総合計画の策定に関わらせてもらいました。一町民の気持ちで、まちづくりの指針となる計画の、私なりの解釈を伝えたいと思います。

目指す将来像

本計画で内子町が目指す将来像は「町並み、村並み、山並みが美しい持続的に発展するまち」。平成17年の合併時から掲げ続けた、住民にはなじみの言葉ですが、外から見ればこれほど心に響く言葉はありません。「町並み、村並み、山並み」とは、暮らしと産業が連なり作り出す景色。「美しい」とは、好ましさや誇りであり、私たちのアイデンティティです。人々が生きた証である文化を大切にし、残していくという町の姿勢と住民の願いが、この将来像に込められています。

土地の資源を生かした手漉し和紙や酒などの産物、暮らしから育まれる祭礼・神事・民俗風習、田畑を耕し農作物を植える五穀豊穡を祝った生業——。そのような営みが、美しい景観を形作ってきました。手間がかか

るからこそ、そこに郷土愛が生まれます。愛情を持って誰かがバトンタッチしてくれたおかげで、今も続いているのです。

「歴史にのぞみ、未来をひらく」

シンポジウムのテーマ「歴史にのぞみ、未来をひらく」は、私たちがどうあるべきかという行動理念です。歴史とは、先人たちが今の内子町を形作ってきた行動の積み重ねであり、懸命に生きてきた証。「のぞむ」には、①敬意を表して振り返る「望む」、②向き合い、時に挑戦する「臨む」、③未来への道しるべを見いだす「希む」——の3つの意味が込められています。内子町の歴史は、多くの町民が誇る、受け継ぐべきまちづくりの根幹。幅広い世代がそれぞれ考え、工夫し、追求し続ける姿勢が必要です。

「未来をひらく」という言葉には、未来に向けてこれまでのまちづくりの質をさらに高め、切り拓いていくという思いが込められています。多様な人々が協力し、柔軟に可能性を広げ、世

界に視野を向け、挑戦し続けること。私たちがアクションを起こすことが未来を守り、選択肢を残すことにつながるはずです。

小さくても輝く「縮充社会」へ

人口減少は避けられない課題です。同計画で内子町は2045年時点で人口1万人を目指すとし、「地域の担い手が支え合うことで、豊かな暮らしや地域活動の維持の可能性が高まる」と書いています。人口が減少する中でも幸福で充実した社会を「縮充社会」といいます。縮小をただ悲観するのではなく、充実した社会を目指すことが大切です。人口が増える時代とは違う価値が必ずあるはず。何が幸せか、その地域のものさしを作る必要性があります。

トークセッションで皆さんが語り合う姿に感動しました。「内子らしさ」とは何か、地域の魅力を語り合い実感することが、歴史を受け継ぐ力になります。高齢者は若い世代にまちの本当の魅力を伝え、子どもは大人たちとここで頑張る原動力をくれる——どの世代も社会を守る存在です。みんなが活躍し、笑い合えるまちを目指しましょう。

地域の意志というバトン

先人たちが築いた「文化」は、まちの歴史を表し、ずっと残り刻まれていくもの。町外にいる人にもふるさとを忘れさせない、大きな力を持ちます。いつか皆さんも先人として振り返られる日が必ずやってきます。「地域の意志」というバトンを私たちは握っていて、いつか誰かに渡していくのです。

合併20周年はターニングポイント。総合計画に基づく行動は、このまちで私たちが幸せに生きていくための大きな種まきです。内子町にしかできないまちの追求が続いていくよう、「歴史にのぞみ、未来をひらく」という言葉に、願いを込めたいと思います。

愛媛大学学長特別補佐
未来価値創造機構副機構長
教授 井口 梓さん



第二部 講演